

子どもの非認知能力の育成に  
取り組む保護者

518名に聞いた

子育て意識調査 | 2026年版

# はじめに

Five Keysは2011年より15年にわたり、子どもの非認知能力開発に特化した専門塾として運営してまいりました。これまでに多数の卒塾生を輩出し、現在も多くの塾生が学んでいます。

Five Keysでは、保護者の皆さまに定期的にアンケートへのご協力をいただき、授業運営や教育内容の改善に活かしてまいりました。

今回は、1年6ヶ月以上在籍している塾生の保護者を対象に、子どもの将来に必要な力や、非認知能力開発に対する意識について調査を実施し、518名の回答を得ました。

本レポートでは、その調査結果を「子どもの非認知能力の育成に取り組む保護者518名に聞いた、子育て意識調査2026年版」として公開します。

非認知能力の育成に関心を持ち、実際にFive Keysで学びに取り組む家庭の意識傾向を示す調査結果として、子育てや教育を考えるうえでの参考になりましたら幸いです。

## 調査主体

非認知能力開発専門塾 Five Keys

## 調査目的

子どもの将来に必要な力や、非認知能力開発に対する保護者意識を調査

## 調査対象

Five Keysに在籍する塾生の保護者  
(小学3年生～高校2年生、在籍1年6ヶ月以上)

## 有効回答数

**518名**

## 調査期間

2026年4月29日～5月11日

## 調査方法

Webアンケート調査

## 備考

本調査は、Five Keysに在籍し、子どもの非認知能力開発に継続的に取り組む家庭の意識傾向を示すものです。一般の保護者全体を対象とした調査ではありません。

## 結果の概要

1

本調査では、子どもの将来に必要な力として、  
保護者の**76.8%**が「**自分で考えて行動する力**」を選び、  
「学力・成績」は1.7%、「語学力」は0.8%にとどまりました。

2

**65.1%**の保護者が「**学校教育だけでは将来に必要な力の育成は十分ではない**」と回答。

学校教育で不足しがちな力としては、「折れない力」72.8%、「自分で考えて行動する力」72.2%が上位に挙がりました。

3

子どもの将来への不安として最も多かったのは「AI、デジタルツールへの依存」41.7%でした。

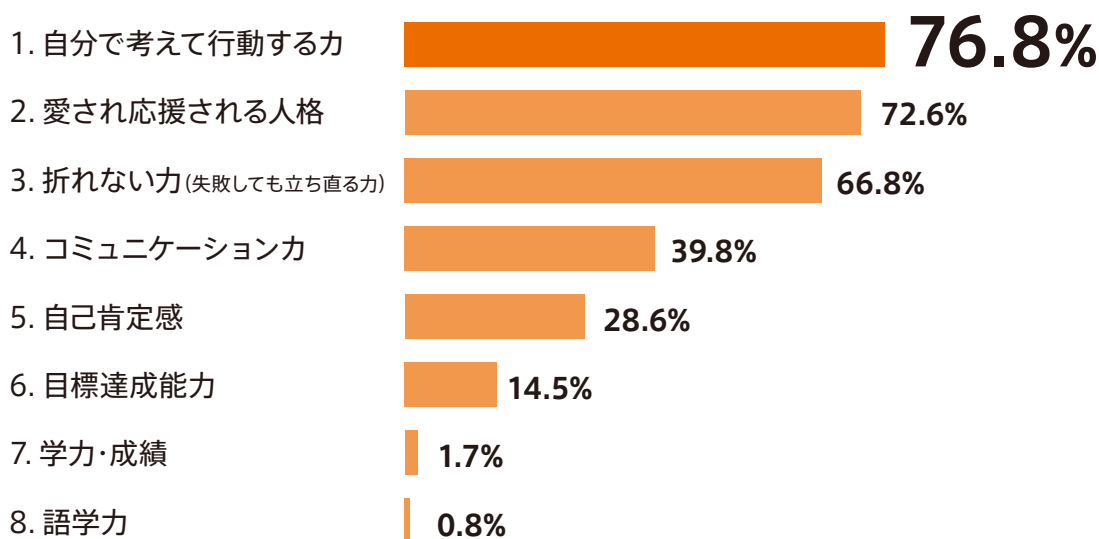
一方で、AI時代に最も必要になる力としては、  
「**自分で考えて行動する力**」が**49.2%**で最多となりました。

4

非認知能力開発に取り組んだ成果としては、  
「**挑戦・積極性の向上**」が**55.0%**、  
「コミュニケーション・対人関係の向上」の48.8%が上位となり、  
子どもの行動面・対人面での変化を感じる保護者が多いことが示されました。

# 子どもの将来に必要なのは、「学力」よりも 「自分で考えて行動する力」 保護者の76.8%が重視

Q1. お子さまが将来、社会で生きていくうえで重要だと思うものを上位3つお選びください。



## 学力・語学力よりも、変化の時代を自分で生き抜く力が重視されている。

- ・上位項目は、いずれもテストの点数だけでは測りにくい「非認知能力」に関わる力でした。
- ・一方で、「学力・成績」は1.7%、「語学力」は0.8%にとどまりました。
- ・保護者の関心が、点数化しやすい力だけでなく、変化の時代を自分らしく生きていくための土台となる力へ広がっていることがうかがえます。

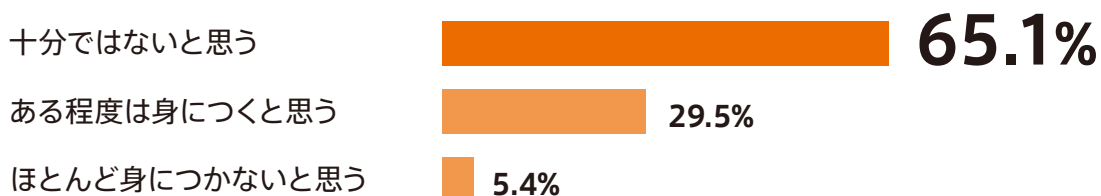
### 専門家コメント Five Keys代表 井上顕滋

この結果は、知識や認知能力(学力)はテクノロジーによる代替や補完が容易になっている一方、上位にある非認知能力がないと知識も社会で機能しないことを、不確実性の高い時代において保護者が経験的に察知しているためと考えられます。予測困難な時代を生きる子どもたちにとって何が本質的な強みとなるか、保護者の意識が明確にシフトしていることを示しているように感じます。「自分で考えて行動する力(主体性)」や「折れない力(レジリエンス)」、他者と良好な関係を築く「愛され応援される人格」これら上位3つの非認知能力は、学力などの認知能力を社会で生かすための強固な土台となります。このような内面の力や人間力が将来の幸福や社会的活躍に直結するという認識を持つ保護者だからこそ非認知能力教育に力を入れていると言えます。家庭においては、テストの点数や順位という「目に見える成果」に一喜一憂するのではなく、子どもが自分で決めて行動したプロセスや、失敗しても次に生かそうとする姿勢そのものを認め、見守るスタンスへと意識を切り替えることが求められます。また、「何ができる人に育てるか」だけではなく「どのような人(在り方)に育てるか」という視点も重要と言えます。

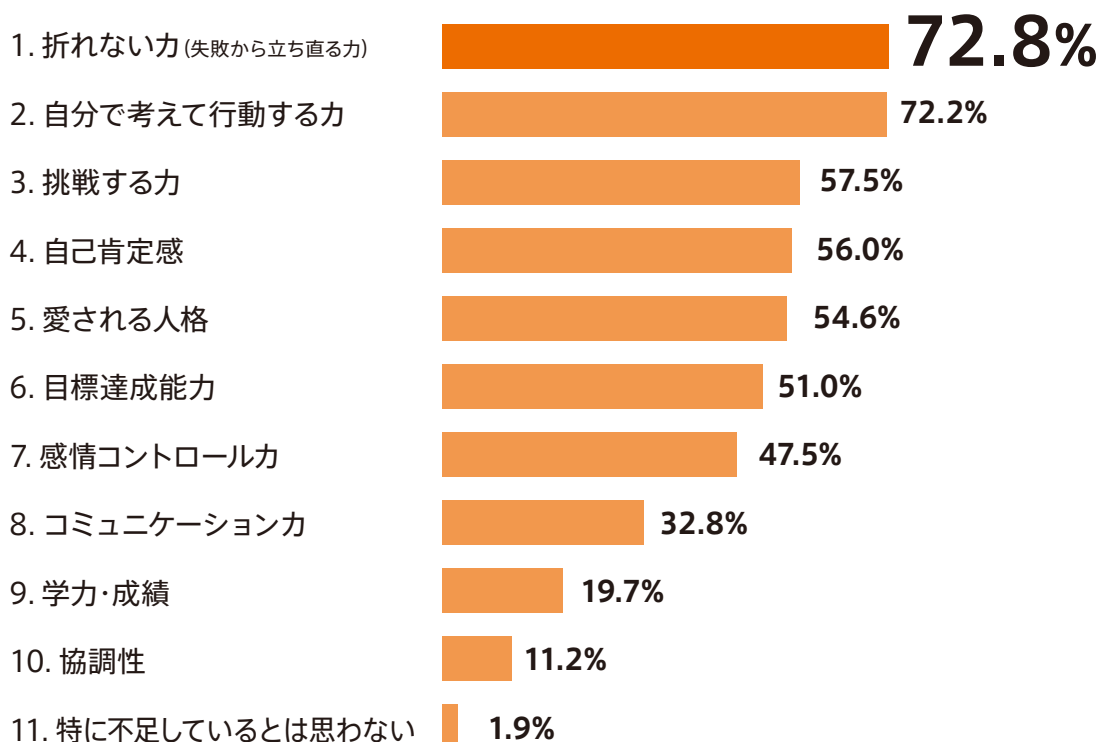
学校で学ぶ力と、社会で生きる力の“接続”に課題

# 保護者の65.1%が学校教育だけでは十分ではないと回答

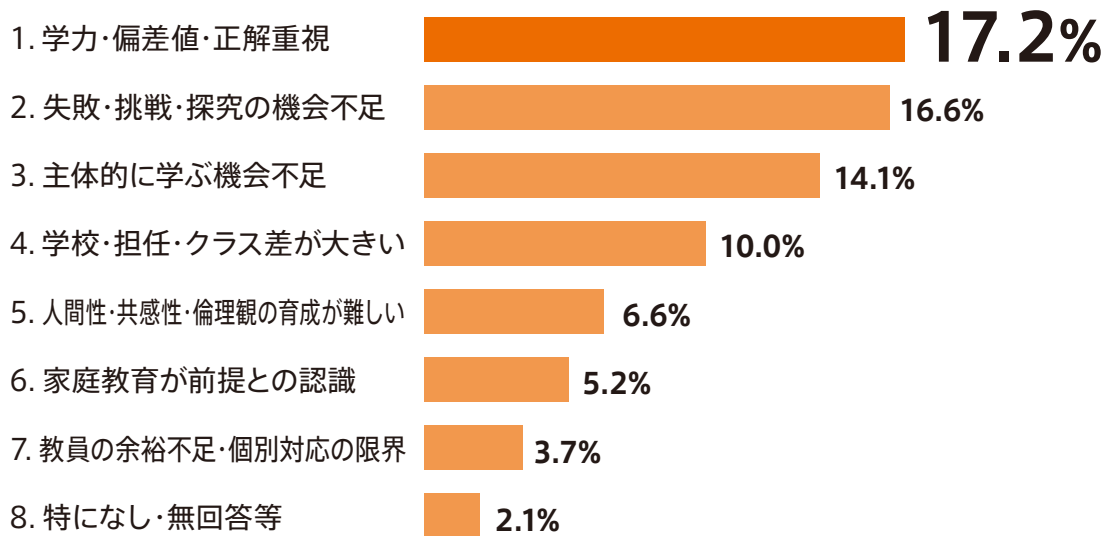
Q2. 学校教育は、将来に必要な力のどの程度を担っていると思いますか？



Q3. 現在の学校教育において、十分に育ちにくい、または不足しがちだと感じる力をお選びください。(複数選択可)



#### Q4. 前項の質問でお選びいただいた理由について、具体的なエピソードやお考えがあればご記入ください。



### 学校教育で身につく力と、社会で生きる力。その接続が問われている。

- ・保護者は、学校教育そのものを否定しているのではなく、知識や成績だけでは測りにくい力を、家庭・学校・学校外の学びや体験を通じて補完的に育てていく必要性を感じていることがうかがえます。
- ・本調査の結果は、学校教育の役割を否定するものではありません。むしろ、学校で育つ力に加えて、家庭や学校外の学び・体験を通じて、失敗から立ち直る力、自分で考えて行動する力、挑戦する力を補完的に育てていく必要性を示していると考えられます。

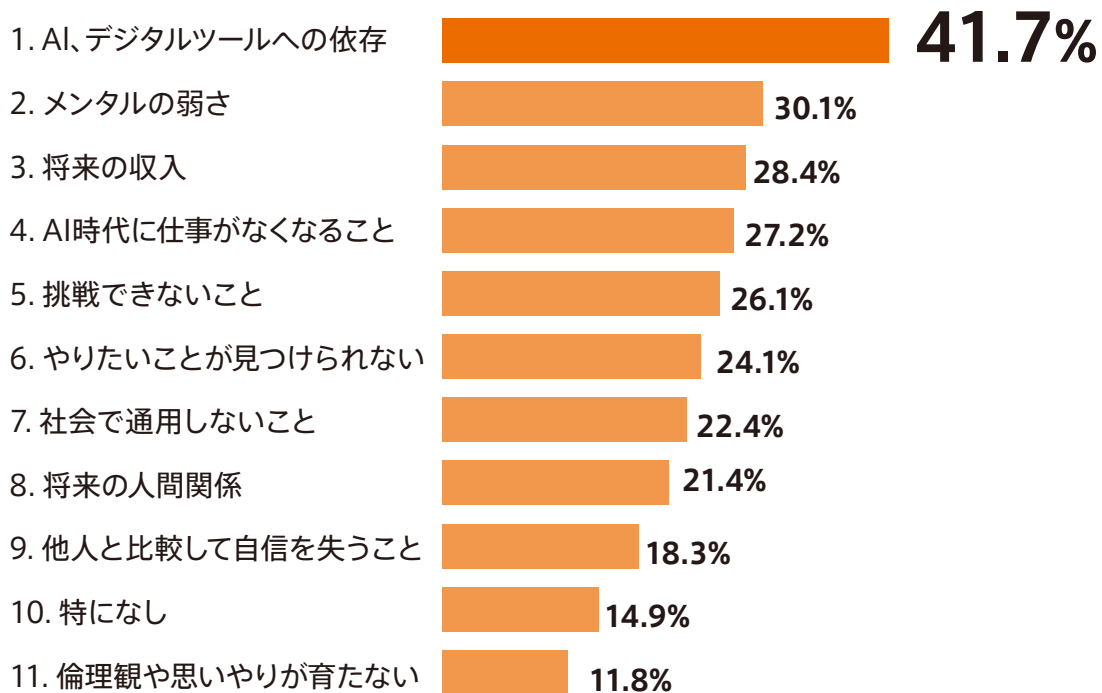
#### 専門家コメント Five Keys代表 井上顕滋

本調査の結果は、現在の学校教育の多くが一律の集団管理や「ミスのない正解」を評価する構造(減点主義)から脱却できておらず、子どもが自発的にリスクを取って挑戦したり、安心して失敗したりできる心理的スペースが不足していることが原因と考えられます。生成AIをはじめとするテクノロジーが社会インフラ化し、知識の獲得や「正解のある問い」への対応が自動化される現代だからこそ、より切実な問題として浮き彫りになったと言えます。保護者が学校教育において「折れない力」や「自分で考えて行動する力」の不足を感じているのは、これからの社会では、保有する知識の量ではなく、不確実な状況下で失敗を恐れずに未知の課題へ挑戦する主体性こそが本質的な強みになると直感しているからに他なりません。従来の偏差値や正解を固定化する教育システムの中では、失敗は避けるべきものとされがちであり、これが結果として子どもの挑戦意欲や自己効力感の醸成を阻む要因となっています。今後の学校教育には、正解のない課題に対して試行錯誤を繰り返す「探究型・プロジェクト型の学習」を本格的に取り入れるべきではないでしょうか。失敗したプロセスから何を学び、どう次に生かすかという「客観的に自分を振り返る力(メタ認知)」を育むアプローチが不可欠であると考えます。また、教育を学校だけに依存するのではなく、家庭を「いくらでも失敗していい安全基地」と位置づけることも重要です。親が自覚なく先回りして正解を与えてしまう過干渉状態にあるご家庭は非常に多いので、そのようなご家庭では、本当に重要なこと以外は干渉したい衝動を抑え、「意識的に」子ども自身に選択と試行錯誤を委ねてみることをおすすめします。

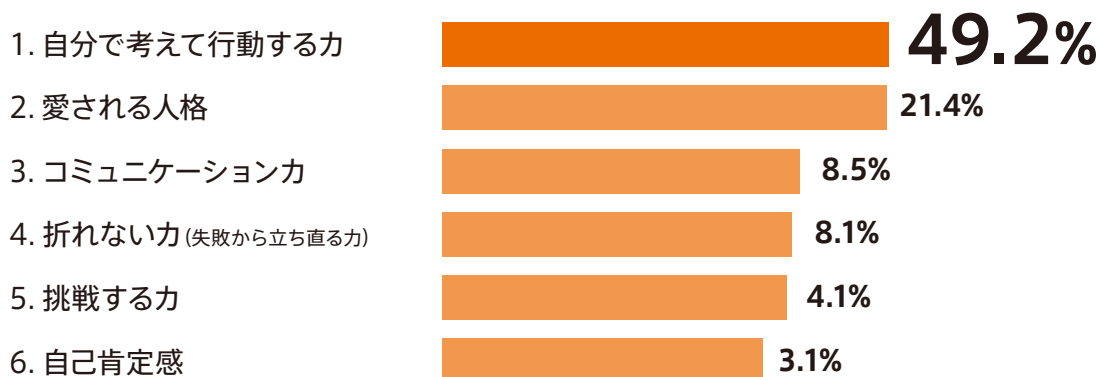
AIが身近になる時代に、子どもに必要な力は何か

# 最多回答は 「自分で考えて行動する力」49.2%

Q5. 保護者として、お子さまの将来に対して不安に感じていることをお選びください。  
(複数選択可)



Q6. AI時代に最も必要になる力は何だと思えますか？



## AIを使う力以上に、AIに流されず自分で考える力が求められている。

AIやデジタルツールが身近になるほど、単に情報を得る力やツールを使いこなす力だけでなく、問いを立て、自分で判断し、行動につなげる力が重視されていることがうかがえます。

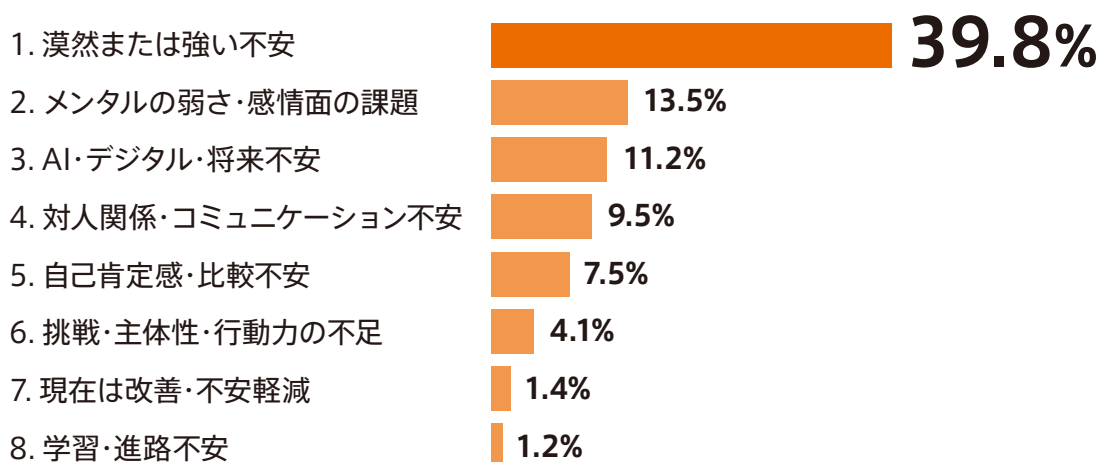
### 専門家コメント Five Keys代表 井上顕滋

AIが最適解を瞬時に提示するようになった今、「指示を待つ」「正解をなぞる」だけの姿勢は存在価値を失うという危機感があるためであると考えられます。同時に、技術が高度化するほど、逆に「人間ならではの強み」の価値が相対的に高まるという構造を保護者が捉えていることも示しています。最多の「自分で考えて行動する力」は、AIが提示する最適解を鵜呑みにせず、自ら問いを立てて動く主体性の重要性を示しています。また、次点の「愛される人格」や「コミュニケーション力」は、どれだけ技術が進化しても代替できない、他者と響き合い協働する力の価値を物語っています。デジタルツールを道具として使いこなす、変化に飲まれないためには、自律的な思考力と豊かな人間性という「内面の軸」を育むことが、AI時代を生き抜く最大の防衛策であり推進力になります。ご家庭においては、デジタルツールを単に遠ざけるのではなく、「あなたならこれをどう使う？」と問いかけ、子どもが主導権を持って道具を使いこなす対話を大切にしましょう。日頃から子どもの固有の感性や意見を否定せず、一つの人格として尊重することが「自分独自の軸」を育てます。

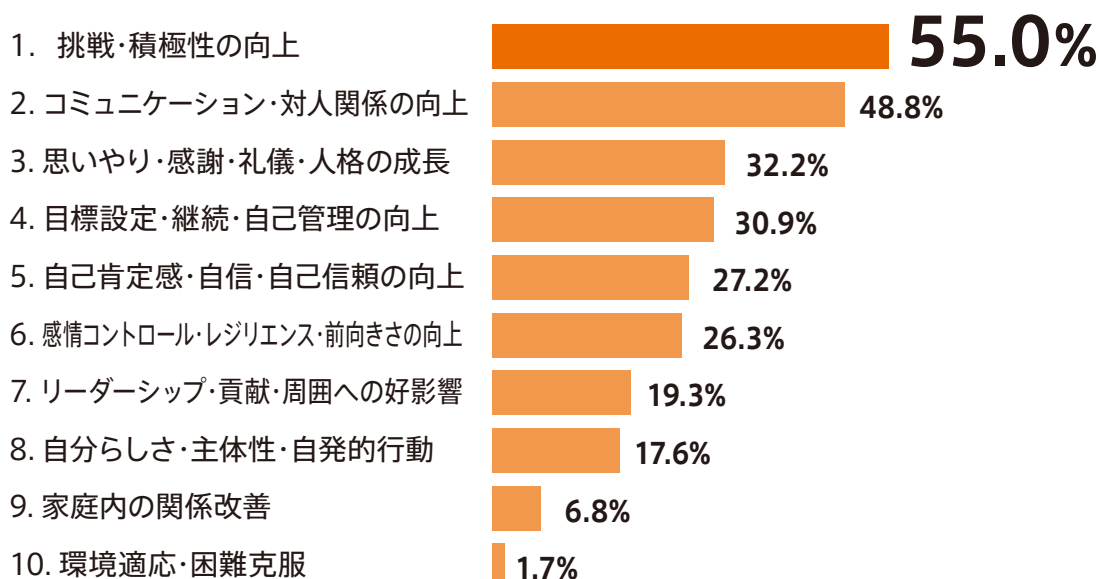
## 非認知能力開発で見た子どもの変化

# 保護者の55.0%が 「挑戦・積極性の向上」を実感

Q7. 【設問Q5】に関して、取り組む前(Five Keysに入塾前)はどうでしたか？  
(自由記述回答を内容別に分類・集計したものです)



Q8. 保護者として非認知能力開発に取り組んで、子どもにどのような成果があったと感じるか、具体的にすべてご記入ください。(自由記述回答を内容別に分類・集計したものです)



## 非認知能力開発は、子どもの行動、対人関係、自己理解、 家庭内の関係性にも変化をもたらす可能性がある。

- Five Keysに入塾する前、保護者の多くは子どもの将来に対して、漠然とした不安や、メンタル面・対人関係・自己肯定感に関する不安を抱えていました。
- 一方で、非認知能力開発に取り組んだ成果としては、「挑戦・積極性の向上」が55.0%、「コミュニケーション・対人関係の向上」が48.8%と、行動面や人との関わり方における変化が多く挙がりました。
- また、「思いやり・感謝・礼儀・人格の成長」「目標設定・継続・自己管理の向上」「自己肯定感・自信・自己信頼の向上」なども上位に並びました。
- 非認知能力開発は、単に知識を身につける学びではなく、子どもの行動、対人関係、自己理解、家庭内の関係性にも変化をもたらす可能性があることが示されています。
- 入塾前には、子どもの将来に対して「漠然または強い不安」を抱えていた保護者が39.8%にのぼりました。一方で、非認知能力開発に取り組んだ後に感じた成果としては、「挑戦・積極性の向上」が55.0%、「コミュニケーション・対人関係の向上」が48.8%と、子どもの行動面・対人面での変化が多く挙がりました。

### 専門家コメント Five Keys代表 井上顕滋

適切な非認知能力開発を経て「挑戦・積極性の向上(55.0%)」や「対人関係の向上(48.8%)」といった、具体的な行動変容が、親が認識できるレベルで起きています。これは、非認知能力は、心理的安全性が担保された環境で、「適切な挑戦」と「適切な振り返り(メタ認知)」を繰り返すことにより、自己効力感が刺激され、それがドミノ倒しのように積極性や対人関係の向上といった目に見える行動変容へ波及していく動的な性質を持っているためです。非認知能力は数値化しにくく、一朝一夕には育たない性質を持ちますが、確かなアプローチによって子どもの姿勢に明らかな変化をもたらすことが示されています。特に「挑戦」や「感情コントロール」、「目標設定」など、多岐にわたる項目で高い成果が実感されているのは、自己肯定感や自己効力感、自己信頼の向上が、他者への思いやりや新たな行動へと繋がる「能力のシナジー効果」も起きているためです。ご家庭では、成果を急いで劇的な変化を期待するのではなく、「前より感情の切り替えが早くなった」「自分の言葉で理由を話せた」といった小さな成長をキャッチし、言葉にして伝えることが大切です。そういったことを継続していくことで子どもの「自己信頼」が育まれます。

## まとめ

本調査の結果は、社会の変化を敏感に捉え、子どもの本質的な人間力を重視する保護者層の高い問題意識を示しています。

これらの保護者の最大の特徴は、AIが社会インフラ化し、これまで以上に予測困難な未来に対して、漠然と不安を抱くだけにとどまらず、子どもの「内面の軸」を育てる重要性を深く理解し、実践している点にあります。学校教育の役割や限界を客観的に見極め、「主体性」や「レジリエンス(折れない力)」を、家庭や外部の環境を通じて補完しようとする意志がうかがえます。

さらに、実際に非認知能力開発に取り組むことで、子どもたちの「挑戦・積極性の向上」や「対人関係の向上」といった具体的な行動変容を高い割合で実感している点は重要です。変化の激しい時代において、子どもが自分らしく生き抜くための土台をどう築くか。本調査に表れた保護者たちの実践と成果は、これからの教育のあり方を示す貴重な先事例と言えます。

Five Keys代表 井上顕滋

## 解説

### 井上 顕滋 (いのうえ けんじ)

非認知能力開発の専門家。心理学・脳科学をベースに、20年以上にわたり子どもから経営者まで「人の可能性を引き出す指導」を行っている。子ども向け非認知能力開発専門塾「Five Keys」創設者として、延べ6万人以上の子ども、保護者を指導。



- 子ども向け非認知能力開発専門塾「Five Keys」代表
- リザルトデザイン株式会社 代表取締役
- 非営利型一般財団法人 日本リーダー育成推進協会 特別顧問

### プロフィール

1970年生まれ。2004年Result Design株式会社を設立。最先端の心理学および脳科学を体系的に学び、それらを融合させることで独自の能力開発メソッドを確立。これまでに3,000社以上の企業で経営者・経営幹部への指導・研修を実施。

- 1年間で離職率を8分の1に改善
- 2年間で経常利益26.8倍を達成
- 営業成約率 平均31.9%向上

エグゼクティブコーチ、メンタルトレーナーとしてオリンピック出場の日本代表選手や 世界一に輝いたプロスポーツ選手のサポートも行っている。

### 著書



子育てママに知ってほしい  
**ホンモノの  
自己肯定感**  
著者:井上 顕滋  
出版社:幻冬舎



7つの“できない”を変える  
**“できる”部下  
の育て方**  
著者:井上 顕滋  
出版社:幻冬舎



12歳までに伸ばしておくべき  
**5つの  
非認知能力**  
著者:井上 顕滋  
出版社:幻冬舎